

このページは、小・中学生に向けて
梅光学院大学子ども学部子ども
未来学科(地域共生ゼミ)の学生が
作っています。

※イラスト 前田奈菜美さん

しものせき キッズページ



ふたおいじま やまのかみしんじ 「蓋井島 山ノ神事」



▲ちよるるの登場。それぞれの山は「つくりもの」と呼ばれる人形などで飾られます。

「神迎え」



下関には、私たちの生命や自然を守っているいろいろな神様の伝説があり、蓋井島もその一つです。蓋井島は、面積2・35平方キロ、人口約100人の、響灘に浮かぶ小さな島です。吉見港から船で35分の場所にあります。

蓋井島には「山ノ神事」という、古くから伝わる貴重な祭りがあり、6年に一度、戌・辰の年に行われてきました。最近では、昨年の11月23・24・25日に行われました。

島の集落の北東の丘の「二の山」「三の山」「四の山」と呼ばれる森それぞれに「山の神」が

いると信じられています。そして、山の神を迎え入れ、神事を執り行うのが、代々引き継がれてきた「当元」です。神を迎え入れるため、畳を新たに、新しい木綿の幕を張り、新しい藁で作ったしめ縄、腰掛傘などを用意します。



「まかない」



当元は、祭事の準備や「まかない」の準備が大変だと言われています。

昔は、島の外に住んでいる親戚がこの祭りのために帰ってきて「お客事」、つまり「大まかない」が行われていました。それは大正時代以降に中止され、組中のものだけが集まっています。

「まかない」は三日間にわたって行われ、「まかない」のために用意されるものはたくさんあります。江戸時代の寛政8年の覚書の記録によると、一番古いものでは、れんこん、しいたけ、かんびょう、水こんにやく、玉子など約39種類の品物が準備されたそうです。今日も同じように覚書が残されています。



▲山の森の分かれ道では、「七年目に会おう」と別れて、山へ向かいます。

「神送り」



「神送り」は山の神を山に送り返す行事です。

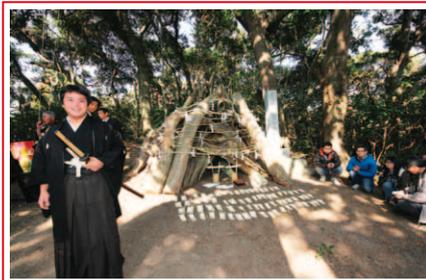
神の送り迎えの奉仕は「太夫」と呼ばれる神官が行います。「太夫」は各当元の家を回り歩き、山の神に森に帰るように勧めます。

それぞれの山の当元や氏子は、そろって神を山に送ります。当元のみが脇差を一本腰に差しています。神が山の森に帰るとき、当元と氏子は「七年目に会おう」と呼び合います。山の神は、枯れ木を寄せ盛った神座である「神籬」の中に帰っていきます。

ます。今年も、紅白もち、ブリやヒラソ、果物(カキ)などが用意されました。



1月号の編集記者
北山 梓さん(左)、小西真梨子さん(右)



▲四の山の神籬。神様を山に帰す「神鎮め」がこの前で行われます。



▲各当元の家では、山の神を迎える「神迎え」が行われ、三日間山の神と一緒に過ごします。